U BOJ !

Franjo Marković 詞

Ivan pl. Zajc 曲(1866)

Allegro con fuoco

Tenor 1. 2.

Bass 1. 2.

f

U boj! u boj! Mač iz to - ka bra - ćo! Nek duš- man
taj gru - di na - še plam- te: u - ti - ša

poco meno

pp

zna ka - ko mre - mo mi Grad naš već go - ri,
rik ma- ča na - ših zvek. Ko bra - tac bra - ta

Tempo I°

f

si - že do nas već žar. Rik nji - hov o - ri,
Zrinj- skog po- ljub'- te svi. Za mnom na vra - ta

1. 2.

bije - san je nji - hov jar.
vjer - ni ju-na - ci Ko po - žar vi.

p

vi. Sad, bra - ćo,

boj [bɔ́i] mač [mátʃ] braćo [brátʃɔ] dušman [dúʃman] naš [náʃ]

već [vétʃ] siže [sízge] njihov [njíhɔv] bijesan [bijésan] jar [já:r] mača [mátʃa]

bratac [brátats] Zrinjskog [zrínjskɔg] poljub'te [pɔljú:pte] junaci [juná:tsi]

p *legato*

Sad zbo - gom bud', do - me pun' - mo puš - ke, sa - mo - kre - se, na - še gro - me,

naš, za - u-vijek, oj zbo - gom! Od svud i na - še trije - se, ne - ka o - re, ru - še, mo - re!

svud na te duš - man i - de prijek.

Brus - mo lju - te na - še ma - če; ne - ka sije - ku

assai cresc.

p I već u grob sve - ti trup skla - da tvoj, al' ja - če, ja - če. Pun' - mo puš - ke, sa - mo - kre - se,

assai cresc.

con anima

ne - će! Za te sin svak' u boj se kre - će, do - me na - še gro - me, na - še trije - se, ne - ka o - re,

puške [púʃke] trijese [trijése] sijeku [sijéku] jače [játʃe] zauvijek [záuvijek]

naš, ti vije - kom štoj! Za dom, za dom sad u

ru - še, mo - re! Ajd u boj! u boj!

boj! Ma pa-kle-na množ na nj di - že svoj nož, ajd u boj! Nas

nož. Nas

mal al hra - bar je broj! Tko, tko će ga strt? Smrt vra - gu

smrt! Sad zbo - gom smrt.

Za dom u boj! za dom u boj! Sad, bra - ćo,

Za do - mo- vi - nu mrije - ti ko-li - ka slast;—

Prot' duš-ma- ni - nu! Mo - ra on, mo - ra past! — —

ajd [ajd] vijekom [vijékɔm] množ [mnɔ́ʒ] hrabar [hrábar] strt [strt]

U boj! u boj! Mač iz toka braćo!
～へ 戦い ～へ 戦い 剣を ～から(抜け) さや 兄弟よ

Nek dušman zna kako mremo mi.
～させよ 敵に 知る いかに 死ぬ 我々が

Grad naš već gori, siže do nas već žar.
町は 我々の すでに 燃える 迫る ～まで 我々に すでに 炎は

Rik njihov ori, bijesan je njihov jar.
怒号は 彼らの 響く 荒れ狂う ～は 彼らの 狂気

Ko požar taj grudi naše plamte: utiša rik mača naših zvek.
～のように 燃える炎 この 胸は 我々の 燃える 黙らせよ 怒号を 剣の 我々の 刃音で

Ko bratac brata Zrinjskog poljub'te svi.
～のように 弟が 兄に ズリーンスキーに キスしよう(別れの) 皆で

Za mnom na vrata vjerni junaci vi.
続け 私と共に ～まで 城門 忠義の 勇士 諸君よ

Sad, braćo, pun'mo puške, samokrese,
いざ 兄弟よ 弾丸を込めよ 銃に 鉄砲に

naše grome, naše trijese, neka ore, ruše more!
我々の 雷を 我々の 稲妻を ～させよ 突き進む 粉砕する 大海(囲む敵)を

Brusmo ljute naše mače; neka sijeku jače, jače.
研げ 鋭く 我々の 剣を ～させよ 切る より強く より強く

Pun'mo puške, samokrese, naše grome, naše trijese,
弾丸を込めよ 銃に 鉄砲に 我々の 雷を 我々の 稲妻を

neka ore, ruše, more! Ajd u boj! u boj!
～させよ 突き進む 粉砕する 大海(囲む敵)を いざ ～へ 戦い ～へ 戦い

Sad zbogom bud', dome naš, zauvijek, oj zbogom!
いざ さらば だ 祖国よ 我々の 永遠に おお さらば

Od svud i svud na te dušman ide prijek.
～から 四方八方 ～の上に 彼女(祖国) 敵は 迫る 怒り狂って

I već u grob sveti trup sklada tvoj, al' neće!
そして すでに ～へ 墓 聖なる からだを 葬ろうとする 汝(祖国)の しかしそうはさせない

Za te sin svak' u boj se kreće,
～のため 汝 息子たちは すべて ～へ 戦い (彼ら)自身が 向かう

dome naš, ti vijekom stoj!
祖国よ 我々の 汝 永遠に 留まれ(あれ)

Za dom, za dom sad u boj!
～のため 祖国 ～のため 祖国 いざ ～へ 戦い

Ma paklena množ na nj diže svoj nož, ajd u boj!
～しようとも 地獄から 大軍が ～の上に それ(祖国) 振りかざす 各自の 刃を いざ ～へ 戦い

Nas mal al hrabar je broj! Tko, tko će ga strt? Smrt vragu smrt!
我々は 少ない しかし 勇敢 ～だ 人数は 何者が 何者が できよう それを 滅ぼす 死を 悪魔に 死を

Za domovinu mrijeti kolika slast; Prot' dušmaninu! Mora on, mora past!
～のため 祖国 死ぬ いかに 芳しい 向かえ 敵に 必ず 奴らを 必ず 滅ぼせ

U BOJ！の舞台 「Siget (シゲット)の戦い」

1566(永禄9)年8月20日、城主Nikola Šubić Zrinski(ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキー)が率る将兵と家族4千人が立てこもる、クロアチアのSiget城は、ウィーン攻略を目指すトルコ軍3万人に包囲された。半月余りの抗戦の後、城兵の中の精鋭を選んだ決死隊は、9月7日、ズリーンスキーを先頭に敵軍へ切り込み全員戦死した。この間に態勢を整えたウィーンからの援軍が到着し、クロアチアは侵略を免れた。

April 1992 Shingetsu-kai

クロアチアの愛国歌「ウ・ボイ(U BOJ!=戦いへ)」

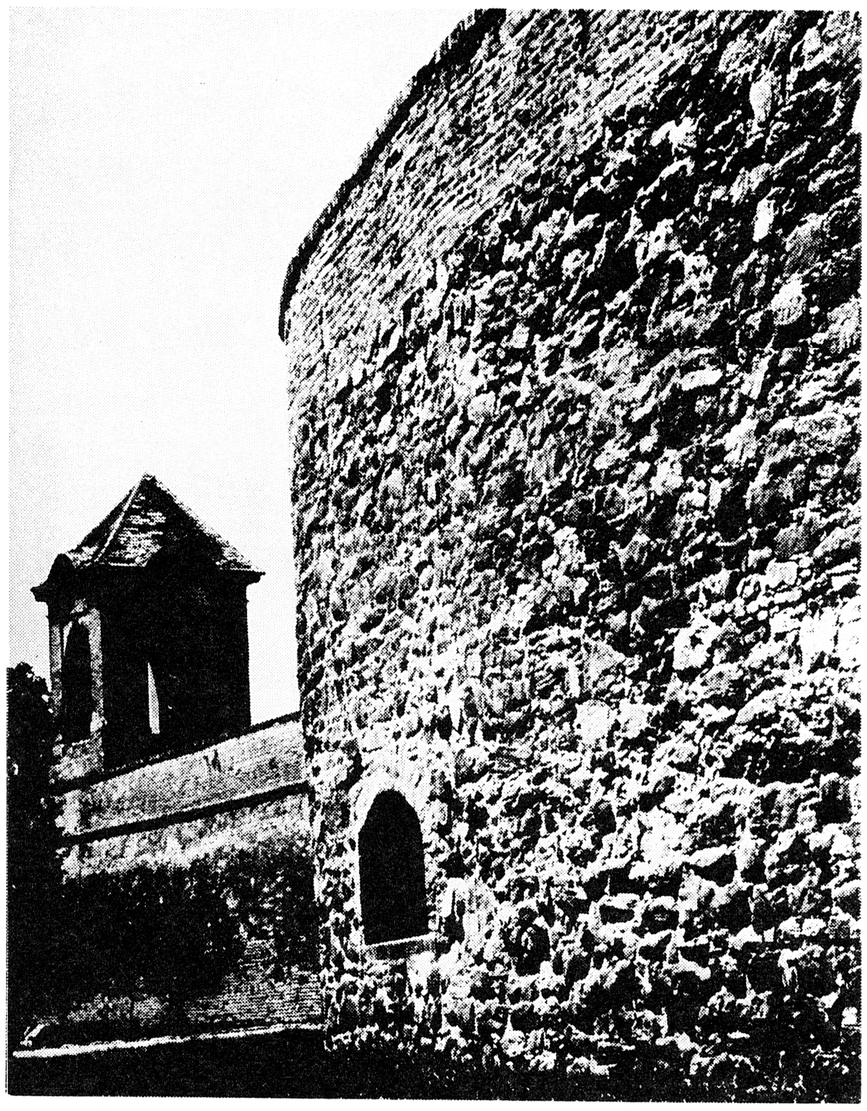
～関西学院グリークラブが歌い継いで73年～

OBの新月会が初めて決定版の楽譜を出版

日本最古の男声合唱団・関西学院グリークラブ(明治32年＝1899＝発足)は不思議な巡り合わせから大正8年(1919)に、クロアチアの愛国歌で男声合唱の名曲「ウ・ボイ」と出会い、秘蔵の愛唱歌として今日まで歌い継いで来た。最初に神戸でチェコ軍の合唱隊から伝えられ、曲名が「戦いへ」という意味であると教えられただけで彼らが帰国してしまったため、約45年間はこの曲はチェコの曲であると思い込み、歌詞の意味も分からないまま原語であるといって歌い継ぎ、口から耳へと伝えられたものを歌って来た。この曲は同クラブやそのOB団体の新月会の演奏会ではアンコールで必ず歌われ、聴衆もこれを聞くまでは納得しないという重要な曲となった。

近年になって新月会による「ウ・ボイ」の正確な姿を探る活動が次第に実を結び、信頼できる資料が次ぎつぎと手に入った。

この曲は1566年(永禄9年)、トルコの大軍に包囲されたクロアチアのシゲット城(Siget、現ハンガリー領シゲトバール＝Szigetvár)の城兵が決死隊を編成し、祖国の不滅を信じて城主ズリーンスキー(Nikola Šubić Zrinski)を先頭に敵軍へ切り込んで行く情景を歌ったもので、クロアチアの愛国詩人マルコビッチ(Franjo Marković 1845-1914)が作詞し、1866年(慶応2年)にクロアチアの国民的作曲家ザイツ(Ivan pl. Zajc 1832-1914)が男声合唱曲として作曲したものだった。ザイツは1876年(明治9年)、このシゲットの戦いをテーマとした歌劇「ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキー」を完成させたが、最後の場面では、歌詞の一部を変えた「ウ・ボイ」が男女の歌手の独唱や斉唱を織り込んだ合唱として、オーケストラの伴奏で歌われる。



シゲット城

この歌劇はクロアチアで大当たりとなり、今日でも日本の忠臣蔵のように上演されるたびに客席は超満員、「ウ・ボイ」の場面では必ず曲のリズムに合わせた満場の拍手が鳴り響いている。

関西学院グリークラブと新月会は愛唱歌の「ウ・ボイ」が、歌い継がれた長い年月の間にザイツの原曲から少しずつ変わって来ている事から、これをもとの姿に戻そうと、確実な資料に基づいて1989年(平成元年)から3年間に3回、歌詞や音符を変更した。その結果、新月会の内部で異なる「ウ・ボイ」を身につけたメンバーが混在するようになり、新月会独自や現役グリークラブとの合同での演奏に不都合が生じるようになった。

また、出所の確かな各資料の間にも相違点があり、どの解釈を最終的に正解とするかの考察が必要となって来た。

一方この曲の楽譜は太平洋戦争後、他の大学グリークラブなどに広がり、各地の男声合唱団によって歌われるようになった。しかしそれぞれ入手の経路や年代によって、さまざまな歌われ方を

していた。

こうした内外の事情から新月会は、決定版としての「ウ・ボイ」の楽譜出版に取り組むことを決め、1989年10月、音楽面と資料面を担当する4人の理事による「ウ・ボイ出版チーム」を発足させた。チームの作業は歌詞の正確な訳や発音の確認と、細部に及ぶ楽譜の検討の両面から進められた。この作業のよりどころとなったのは、新月会がベオグラードのユーゴスラビア作曲者連盟から送ってもらった「イバン・ザイツ生誕150年記念合唱曲集」に収録されている「ウ・ボイ」の楽譜と、やはりこの曲の研究を進めていた慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団OBの一人から寄せられた、ザイツ自筆の楽譜のコピーだった。

歌詞の訳はクロアチア語対英語の辞書を頼りに行い、正誤の指摘や不審な点の答えを求めてベオグラードの作曲者連盟やクロアチアの知人に、何度も手紙で問い合わせた。一方、東京のユーゴスラビア大使館へ出向いたりした。発音についても、同大使館のクロアチア人書記官に発音してもらって録音した。こうした作業は昨年6月、クロアチアの独立をめぐってユーゴスラビアが内戦状態になったため、なかなか思うようには進まなかった。

楽譜の面でも、ザイツの記念合唱曲集に印刷されたものと自筆譜とが完全には一致せず、音楽理論上の検討や先輩の音楽家への問い合わせなどに手間がかかった。

２年余りを費やした作業の結果、ようやく決定版として確信をもてる楽譜ができ上がり、発音に戸惑いそうな単語には英和辞典用の発音記号、曲想の理解に役立たせるための全歌詞の逐語訳、この曲の舞台となった「シゲットの戦い」の概略を合わせて編集し、3,500部を出版した。この発音記号では完全には表示し切れない単語があるが、ほぼ正確な手掛かりをつかむのに便利なため使用した。この印刷に先立ち、関西学院グリークラブと新月会は1992年の年初から、「ウ・ボイ」の歌い方をこの決定版に合わせて統一した。

◎「ウ・ボイ」を伝えたチェコ軍

1914年(大正3年)第1次世界大戦が始まり、チェコ軍は宗主国のオーストリアに動員されてロシア軍と戦わされた。間もなく祖国の独立を願ってロシア軍に投降し、逆にオーストリア軍と戦った。

1917年(大正6年)ロシアで革命がおこり、ソビエト政府が発足。

1918年(大正7年)ソビエト政府はドイツ、オーストリアと単独講和。6万人のチェコ軍はソビエト政府に反乱、革命軍と交戦しながらシベリアを東進。日本軍を主力とする連合国軍が「チェコ軍救出」を名目にシベリアへ出兵、9月に救出。

11月、第一次世界大戦終結。

1919年(大正8年)チェコ軍はウラジオストクから順次、海路で帰国を開始。

8月16日、847人を乗せた第3船が台風を避けようとして下関西方で座礁。沈没は免れたが、船は修理のため神戸へ、乗っていたチェコ軍は一時、門司市内に収容。やがてチェコ軍は船の修理中、神戸市で待機する事になり、9月4日、列車で神戸着。

関西学院グリークラブ部員の塩路義孝は英会話の能力を買われて兵庫県の臨時通訳となり、連日、チェコ軍宿舎を訪れるようになる。塩路はチェコ軍がオーケストラと合唱隊を組織して練習しているのを聞き、その水準の高さに驚いた。

9月15日、塩路のあっせんでチェコ軍のオーケストラと合唱隊が関西学院(当時・神戸市)を訪れて演奏会を開く。その演奏を聞いて感動したグリークラブの部員たちの希望で、「ウ・ボイ」など4曲の楽譜がチェコ軍からプレゼントされた。塩路らの部員たちが、その後チェコ軍の宿舎を数回訪れ、歌詞の発音を教わった。

10月30日、船の修理が終わってチェコ軍は故国へ向かって出港した。

付記‥1935年(昭和10年)、グリークラブは東京・日比谷公会堂で開かれた第9回競演合唱祭(現・全日本合唱コンクール)に「ウ・ボイ」を自由曲に選んで出場し、初出場の第7回から3年連続して第1位の座を獲得した。この時から「関学グリーのウ・ボイ」が、日本の合唱界で有名になった。

◎「ウ・ボイ」の原曲探究

1949年(昭和24年)グリークラブの一部員とチェコスロバキアの大学生との文通の中で「ウ・ボイはチェコスロバキアの曲ではなく、歌詞の感じからいえば、ユーゴスラビアの曲らしい」と教えられたが、その確証をつかむ事はできなかった。

1965年(昭和40年)グリークラブがニューヨークで開かれた第1回世界大学合唱祭にアジア代表に選ばれて参加した際、ユーゴスラビアから参加していたスコピエ大学の合唱団から「ウ・ボイはユーゴスラビアの曲で、有名な歌劇の中で歌われている」と教えられた。しかし同大学はクロアチアとは違うマケドニア共和国にあるため、それ以上の詳しい事は分からず、同合唱祭事務局にこの曲についての調査を頼んで帰国した。

1972年(昭和47年)ニューヨークの同事務局から「この曲は1866年、クロアチアの作曲家イバン・ザイツが作曲し、ザイツは1876年、この曲のテーマから歌劇ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキーを完成させた」と知らされた。この歌劇で歌われる「ウ・ボイ」の楽譜のコピーが同封されて来た。

1975年(昭和50年)一人の新月会会員が東京のユーゴスラビア大使館を訪れ、歌劇で歌う「ウ・ボイ」の歌詞を英語に訳してもらった。

1976年(昭和51年)同新月会会員がユーゴスラビア大使館からこの歌劇の全曲を収めたレコード(LP3枚組)を借り出し、本場での「ウ・ボイ」の演奏を聞き、解説のパンフレットから歌劇の筋書きと「シゲットの戦い」の概要が分かった。

1978年(昭和53年)新月会会員が大阪外国語大学にクロアチアの首都ザグレブから、女子学生のミルナ(Mirna Potkovac)が留学している事を知り、彼女を通じて本国から、貴重な資料を順次手に入れることができるようになった。

1989年(平成元年)「ウ・ボイ」の原曲を探究していた慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団の一人のOBから、ザイツ自筆の男声合唱曲「ウ・ボイ」の楽譜コピーの提供を受けた。

また、「男声合唱曲ウ・ボイの決定的な楽譜が欲しい」と頼んであったベオグラードのユーゴスラビア作曲者連盟から、ユーゴスラビア科学芸術アカデミーが編集してザグレブで印刷、1983年(昭和58年)出版の「イバン・ザイツ生誕150年記念合唱曲集」が届き、その中に目的の「ウ・ボイ」が収録されていた。

新月会の「ウ・ボイ」出版チームが発足した。

1991年(平成3年)8月、クロアチアの元日本留学生ミルナから「戦争のおかげでズリーンスキー(注. 歌劇)がとてもはやっています。特にウ・ボイ、ウ・ボイという曲が。‥‥」と便りがあった。

1992年(平成4年)4月、新月会が「ウ・ボイ」の決定版楽譜を出版。

平成4年4月　新月会